Q9：川辺川で過去、このような濁りの長期化は無かったのですか？

A9 ：昭和38年8月の水害時にも、今回のような多くの山腹崩壊が生じ、五木村まで河床に大量の土砂が堆積し大きな土砂災害となりました。その当時の館報「さがら」に洪水を1ヶ月経過しても濁水が続いている内容の記事があります。
このように山腹崩壊等により多くの土砂が川に堆積するとこのような濁りの長期化は起こりうる現象であると考えられます。

◎昭和38年10月5日発刊　館報「さがら」

この教訓を生かそう

恐怖の川と化した川辺川

復旧対策を推進

激甚地指定は有望

感激の救援活動

村外からもぞくぞく

命を一呑みにし、三三六戸の家を流失又は破壊、一八二ケ所で道路や護岸をズタズタにするなど、三十一億に上る損害を与えた上、ゾッとする間に相良村を襲った。濁つた血のような濁流は、荒れ狂いながら、橋も家も、田も畠も境なく破壊した。下流には上流での痛ましい状景を訴えるように、家や橋や家財、子供の机から玩具まで、思わず目をそむけたくなるようなものが数時間にわたつて絶えることなく流れ続けた。水の引方は早かつたが、僅か数時間にして相良村も未曾有の損害を受けた。曾つて少々の雨では濁りを見せず濁つても早く澄んで、その水の清さを誇つた川辺川は、あれからすでに一ケ月を経過した現在、なお重く白濁して、あの時の思出を消させようとしない。銀鱗のひらめきも見えぬ。

しかし村も人も懸命に復興に立上つている。

この災害によつて、新村建設中の相良村は橋梁などの場面では、一転して戦前の状況に逆戻りしてしまつた。

災害を受けた個人の救済、各種公共事業の改良復旧等については、村県国が一体となつて、総合的施策がすでに着々と進行中であり、全国的な励ましの言葉や、金品は今なお相次いでいる。しかし今後の復興と防災事業を推進するのはわれわれ村民の努力にかかつている。

禍を転じて福となす。このことは容易ではないが、不可能ではない。この災害についての悲歎や怒りは

家を失なつた人々

食糧を確保

消防団の復旧作業

洪水をかぶつた畑を耕す農家